

墓碑が語るバルトン人脈

稻場紀久雄

バルトン先生の墓碑の前面には生前の経歴・称号・生年（一八五六年五月十一日生於蘇国）・没年（一八九九年八月五日没於東京）等が英文と日本語で書いてあります。碑の裏面には「ミセス・マツ・バルトン大正七年一月三日永眠」という一行が、大きな墓碑であるにもかかわらずその中につつましやかなスペースでこの一行だけが彫られています。

この墓碑から今日は三つのことをお話させて戴きます。まず第一点は墓碑前面の四行目に「スコットランドに生まれた」とありますが、このことについて若干説明させて戴きます。第二点は一番下の行にある「友人建之」の友人とは一体どんな人なんだろうかということについてお話させて戴きます。第三

点目は墓碑裏面の一行より「バルトンのご遺族はどんな方だったのだろうか」とか、「どう暮らされたのだろうか」ということについて述べさせて戴きます。

まずバルトン先生はスコットランドに生まれたということ。ここで注目していただきたいのはユナイテッドキングダムともグレイトブリテンとも書かれていないということです。ここに書くことばは彼にとりましてはスコットランドでなければならなかったのです。といいますのは彼のお父さんは、ジョン・ヒル・バルトンといいますが、スコットランド王室お抱えの歴史編纂官でありました。弁護士としての資格を持たれていた法律家で、生活の方は監獄の所



長さん、何といいますか刑務所長のようなことで立てられていたようです。しかし本職は、作家、しかもスコットランド一の歴史作家でございました。ここにある本ですが、これはチャドウィックという方、この人はイギリスの公衆衛生の父といわれていますが、この方が書いた世界的に有名な「大英帝国における労働人口集団の衛生状態に関する報告書」の全訳です。このチャドウィックという方はイギリスの上下水道事業をリードした、また近代上下水道事業をリードした人ですが、バルトンのお父さんはこの方の友人でした。そういう経緯がたぶんバルトン先生のその後の人生を決めたのではないかと気がします。このようなお生まれ、お育ちでありますので、墓碑にはユナイテッドキングダムというようなことはどうしても書けなかったでしょう。こここのところを私は注目したいと思います。

第二点目の「友人之を建てる」の友人とは一体誰でしょうか。私は友人の内容を調べるのに随分時間がかかりました。実は（調べることは）とても不可

能だという気がしました。幸いにも次の二点の資料である程度の概要は判りました。先ず「大日本私立衛生会雑誌 明治三十三年一月、同会雑誌二〇〇号」に「故バルトン氏の建碑費募集」という案内書が出ており、十六名の方がその発起人となっています。

（発起人の顔ぶれとしては台湾総督府の方々が多く、その他大学関係者・内務省関係者等が見受けられます。）また「学士会月報第一四一号、明治三十二年十一月」に「故バルトン君義捐金募集報告」に義捐に応じた人達の名前が載っています。これが全部で十九名ですが、このうち十三名までが明治二十一年から明治二十九年までの、バルトン先生のいわば教え子あるいは門弟の方々です。

これらの門下生の中で「近代水道百人」（近代上下水道に功勞のあった人達を百人選委員会が選定し、履歴を書いた本）に入っている人は瀧川鋌二という人と佐野藤次郎という人です。お二人は大阪市・下関市或は大阪市・神戸市の水道の創業に関わられました。大阪市・下関市・神戸市というのはバルトン

先生が計画当初から指導した都市なのです。ですから門下生が全部そういうところへ行っている訳です。それからもう一人、浜野弥四郎という方、これは明治二十九年卒業です。この人は台湾で台北・台南・その他の主要な都市の上下水道、特に水道をバルトン先生と共に計画し、建設した人なんです。

さて卒業生名簿を調べて行くうちに先ほどの義捐に応じられなかった人が一人おりました。それは大藤高彦という人です。なぜ義捐に応じられなかったかという点、明治三十二年七月に留学のためにドイツに向かっていたからです。ですからたぶん船の中にいたんですね。ではなぜこの人が重要なのかといえますと、バルトン先生の弟子の中でこの人はたった一人、たぶんたった一人衛生工学を最も熱心に研究し、しかも京都大学の教授になった人なんです。衛生工学を主体とする学者になった人はバルトン先生の弟子の中ではこの人一人です。この方は後にはわれわれの部門では構造力学ですね、当時構造強弱学といってましたが、そちらの方を専門にして上下

水道関係は大井清一という人に譲りました。

この大井清一という人は実は中島鋭治の門下生なんです。話は前後しますが中島鋭治という人はバルトン先生が教授だったときの助教授です。バルトン先生が明治二十九年にお辞めになってから、大正十年までの二十五年の長きに渡って教授を勤められました。ですから非常に沢山の弟子を養成し京都大学・九州大学・北海道大学・その他ほとんど全ての大学に弟子を送り込んだ人なんです。ですから日本の上下水道の本当の巨大な人脈は中島鋭治の人脈なんですけれども、大学関係でバルトン人脈として細々と残ったのがこの大藤高彦です。

大藤高彦という人は最初京大で下水道を、田辺朔郎（京都疏水を造った人）が上水道をそれぞれ分任して講じ、中島の門下生である大井清一に下水道の講座を委譲することになります。大藤高彦はその数年前から大阪市水道部顧問の任にあり、ここで彼の最大の功績は（勿論彼自身の功績も含めて）三高教授時代の教え子の島崎孝彦を大阪市の下水道課長に

据えたことです。島崎孝彦という人は日本の上下水道事業を地方公共団体にあって大きく進めた人です。

そういうことでバルトン人脈を整理してみますと先ず瀧川釰二・佐野藤次郎・浜野弥四郎のような方がつながりまして、大藤高彦を介して島崎孝彦につながっていくんです。それにまた妙に関西に残ったんです。バルトンさんは東京の水道設計をしています。これが関西に移って関西で細々ではありますけれども生き残ったんです。一方巨大な人脈は中島鋭治によって作られる。こういう形になっております。私の感じでは中島人脈を主流と考えますと、バルトン人脈は反主流ですね、そして非常に在野的性格が強いというそういう姿で現在も残っているというところでございます。

最後に第三点目のお話です。バルトン先生はどういう先生だったのかということはどうしても申し上げたいのですが、実はバルトンの教師像を彷彿とさせるものは、残されたお嬢さんの多満さんとその長女島海たへさんの生きざまのなかに見えてきます。

鳥海たへさんは、ピアノ教師として大勢の子供達に慕われつつ平成二年四月生涯を閉じられました。没後生前折々に作った短歌が、家計簿の片隅等に残されておりました。たへさんの長女幸子さんがこれらの短歌を整理し、亡き母の思い出に「鳥海たへ子遺歌集」を刊行されました。

遺歌集を一読して、私には鳥海たへさんが祖父バルトンの氣質を濃厚に受け継ぐとともに、曾祖父ジョン・ヒル・バルトンの文学的才能をも継承していることがはっきり判りました。そこには暖かい愛情、旺盛な好奇心、正義感、人生を生きる誠実さが溢れています。バルトンは、生前大変学生に慕われた教師でありましたが、遺歌集は彼の教師像をも彷彿とさせるものであります。そこで遺歌集から五首を選定し、以下に紹介します。ともかく非常に正義感が強い、非常に愛情深い、そして非常に感覚の鋭い方であると思います。

バルトン先生がそもそもそういう人であったからこそ、多くの門下生が募金をしてあの墓碑を建てた

んです。今日は青山霊園では是非それを見て、そして花を手向けて戴ければと思う訳であります。（拍手）